

法皇山脈と宇摩



四国中央市を東西に貫く法皇山脈。長津小の校歌にも歌われた赤星山をはじめ、「おといこさん」で有名な豊受山、カタクリの花で有名な鋸山、菜の花やコスモスで有名な翠波峰などが連なります。

法皇山脈の名前の由来は、平安時代、白川法皇が京都に寺院を建立する際に、宇摩地方のこの山から献上した木材が非常に優れていたということで、「法皇」の名をつけることを許されたという説をはじめ、諸説あります。



四国中央市はかつて「宇摩」と呼ばれていました。

「宇摩郡（うまのこおり）」という地名が初めて文献に見えるのは、8世紀の初めです。

河内国古市郡西琳寺文書に「伊予国宇麻郡常里の戸主である金集史挨麻呂（かねあつめのふひとやからまろ）が、弟の保麻呂（やすまろ）を大和国飛鳥寺（やまとのくにあすかでら）で受戒させ、名前を願忠と改めた。」という記録が残されています。708年のことであり、「常里」とは現在の土居町津根のことです。

「宇摩」は、1300年以上続く歴史のある地名なのです。それ以前は、馬評（うまのこおり）と呼ばれていたのではないかとされています。

「馬評」と呼ばれるようになった由来として、一説には、古代、金生川や銅山川で朱金や砂金などを集めていた百済からの渡来人が馬をたくさん飼っていたからだという説もあります。彼らは馬についての知識もあり、その飼育も心得ていたので進んで馬を導入利用していました。地方の人びとは驚異の目で眺め、誰とはなしに馬のいる評（郡）、馬評（郡）と呼ぶようになったのではないのでしょうか。

そして、713年に詔が出され、郡郷里名を二文字の好字にするという動きがありました。つまり、この時期に「馬」が「宇摩（麻）」に変わったと考えられます。

また、「古事記」に宇摩志葦牙彦舅尊（うましあしかびひこじのみこと）と宇摩志麻治命（うましまちのみこと）の二人の「宇摩」の文字が使われている神が登場します。「宇摩」という地名はこれらの神の名の「宇摩」をとったという説もあります。

ただ、資料がほとんどなく、正確なことはわからないのが現実です。

